

## シベリヤ出兵

大正9年

- 7月4日 編成下令。
- 6日 聯隊本部・第1第2大隊及第12中隊は屯営出發、丸龜駅より高松駅迄汽車輸送。同日高松港出帆。
- 同10日 浦潮上陸。同十二日汽車輸送を以て「ラズドリノエ」に到り、同地に駐屯。軍予備隊となる。残余は同月八日出發。同様輸送を以て高松港を出帆し、同十一日浦潮上陸、同十三日汽車輸送を以て「ラズドリノエ」に到り、聯隊主力に合せり。
- 8月5日 補充員として兵卒七十三名（上等兵六十五名、一等卒八名）、中尉大野広一の引率を以て到着す（該部隊は八月一日宇品出發、三日午後浦潮に到着）。
- 8月26日 第2大隊（第6・第7中隊欠）を南部烏蘇里守備隊として派遣す。  
馬匹は27日出發、陸路守備地に向ひ、28日到着せり。爾今該部隊は旅団長の直轄とす。但し教育・内務・經理・衛生は聯隊長に於て区處す。  
聯隊本部・第7中隊及第3大隊は9月3日、第一大隊・第六中隊及機關銃隊は同4日、「ラズドリノエ」出發、汽車輸送に依り各出發、当日浦潮着。  
第三大隊は一番川俘虜收容所に、第四中隊は旧海兵団兵營に、第3中隊は「チュルキン」半島に、残余は競馬場兵營に位置し、軍の直轄として夫々守備に就けり。
- 9月11日 南部烏蘇里守備隊兵力増加の爲、機關銃1小隊（長中尉八木清一郎以下30名、馬匹欠）を船舶輸送を以て「バラバシ」に派遣す。
- 19日 機關銃小隊に属する馬匹八頭を、鉄道輸送に依り「ラズドリノエ」に到り、爾後陸行「ベニヤシン」を経て20日「バラバシ」に派遣す。
- 20日 歩兵第10旅団司令部「シコトワ」に出發と共に、聯隊は軍の直轄となる。
- 23日 狙撃砲小隊を編成す。
- 28日 師団主力の上陸後、聯隊（第二大隊・機關銃1小隊機關銃八欠）は師団直轄予備隊となる。
- 10月2日 第六・第七中隊を南部烏蘇里守備隊に増加派遣す（船舶輸送）。
- 3日 宿營地変更し、第3大隊（第11、第12中隊欠）は旧海兵団兵營に、第1大隊（第一・第四中隊欠）は「チュルキン」半島に、残余は競馬場兵營に位置す。
- 4日 第11中隊（中隊長大尉松尾正治以下146名）到着し、大正6年兵238名内地に帰還せり・  
間島附近状況險悪なるに対し、軍は朝鮮軍と策応して出兵するに決したるを以て、師団命令に依り、聯隊より第1大隊（第二・第三中隊欠）・

機関銃隊・狙撃砲1小隊を船舶輸送により「ノウキエフスコエ」に増加派遣し、第1大隊と合して林歩兵大佐の指揮を受けしむ。該部隊は10月16日午前6時「ボセット」着、17日午後5時30分迄の間に於て配備を完了せり。

「オケアンスカヤ」附近匪徒跳梁し状況不穩の爲め、師団は西部守備隊を以て之が掃蕩をなすに決し、10月21日聯隊よりは第三大隊（第10・第11中隊欠）を派遣す。該部隊は払暁より第9中隊を以て包圍及警戒に、第12中隊を以て掃蕩実施に夫々部署し、午後1時に亘り搜索せしも、怪しき露人を引致したる外、何等得る所なく、午後九時帰隊せり。

11月30日 第11中隊と他中隊及銃隊との人員編入換を実施す。

12月7日 午後零時30分「チュルキン」半島第2中隊に於て、擲弾射撃の際誤りて銃を倒し、銃弾附近に爆発して、2名の重傷者、11名の軽傷者を出せり。

12日 南部烏蘇里より狙撃砲小隊（小隊長少尉ト部訴一以下32名）帰隊せり。間島附近の掃蕩一段落を告げしを以て、南部烏蘇里守備隊の配置を変更し、10月15日増派の部隊は左記要領に依り引上げたり。

1、第四中隊（中隊長大尉伊藤佐平以下百二十六名）は、十二月十六日午前「バラバシ」発、「ペトロパーチ」より乗船、午後六時浦潮着、同七時競馬

場兵營に帰隊す。

2、機関銃隊（縦隊長大尉篠原誠一郎以下79名、馬匹25頭、銃6挺）は、12月15日「ノウキエフスコエ」発、陸路行軍を以て19日「ラズドリノエ」着、20日午前5時20分該地出発、汽車輸送を以て午後2時浦潮停車場着、同7時競馬場兵營に帰隊せり。

3、第1大隊本部及第1中隊（中隊長大尉若山七三郎以下131名）は、12月21日午後8時「ボセット」発、22日午前10時浦潮着、午後3時帰隊せり。

大正10年

1月29日 新軍司令官立花大将着任に就き、聯隊（將校以下647名）は午後4時浦潮停車場附近に堵列す。

31日 南部烏蘇里「ペニヤーシン」分遣小隊長中尉岩崎齊以下十九名は、「レーチナヤ」半島に於て馬賊を討伐し、交戦約1時間にして馬賊4名を斃し、3名を捕虜とし、騎銃・拳銃・小銃弾其他若干の齒獲品あり、我に損害なし。

2月27日 午後、侍従武官大内少将海兵團部隊に対し、又同28日午後競馬場兵營並「チュルキン」半島部隊に対し、左の聖旨並令旨を傳達せらる、

聖旨

天皇陛下ニオカセラレテハ派遣將卒一同良ク艱苦ニ堪エ其ノ任務ヲ服行セ

ル段深く苦勞ニ思召サレ大内ヲシテ良ク情況ヲ実視シ尚益々自愛努カスル様申伝ヘヨトノ御沙汰ニ在ラセラル

令 旨

皇后陛下ニオカセラレテハ派遣将卒一同ノ風土異リタル地方ニ於ケル勤勞ヲ深く御心ニカケサセラレ殊ニ寒サモ烈シキ折柄各自一層身体ヲ大切ニスル様宜シク申伝ヘヨトノ令旨ニ在ラセラル

右聖旨並令旨に対し聯隊長及び各大隊長は左の奉答をなす、  
今般特ニ侍從武官ヲ差遣ハサレ優渥ナル聖旨並令旨ヲ賜リ臣等一同感激ニ堪ヘス倍々奮勵努力以テ聖旨並令旨ニ酬ヒ奉ラムコトヲ期ス

右終りて聯隊長及び各大隊長は、行動概況を報告し、職員表及人員表を提出し、兵室の一部を巡視せらる。

- 3月25日 師団長白川中将着任に付、聯隊は「スエトランスカヤ」街に堵列す。
- 4月4日 初年兵掛將校5、下士12、上等兵28、兵卒828名は大野大尉の引率を以て浦潮に到着す。
- 13日 大正6・7年兵上等兵以下762名、外に特務曹長1、下士2は平山中尉、藤岡・梶佐古両少尉之れを引率し、大野大尉の指揮を受け、内地帰還の為め浦潮を出発す。
- 19日より同月27日迄の間に於て、聯隊は歩兵第35聯隊と浦潮に於て守備勤務の交代を為し、又歩兵第30聯隊と「ニコリスク」及其他に於て守備勤務の申継を受く。
- 「ニコリスク」其他に於ける聯隊の新配備左の如し、
- 1、第一大隊（機関銃8） 尼市東部兵營  
内第二中隊（機関銃2） 「イブポリトフカ」  
内1小隊 「リハ」
  - 2、第3中隊の1小隊（機関銃2） 「ツビニンスキー」
  - 3、聯隊本部  
第2大隊（機関銃5）  
第9中隊（機関銃1） 尼市南部兵營  
機関銃隊  
狙撃砲隊（砲3門）
  - 4、第3大隊（第9中隊欠）機関銃6を附す 「グロデコーウォ」支隊  
狙撃砲一門
- 5月18日 第二大隊は南部烏蘇里守備勤務を、歩兵第35聯隊と交代し、尼市着、南部兵營に入る。
- 3月末、浦塩政變の不成功に終りし以来、喧々囂囂政變再起の風説流布せられありしが、五月に入り其声一層大となり、加ふるに「セ」「カ」

軍の「グロデコウオ」「ラズドリノエ」附近より浦潮方向に移動漸く繁く、尼市北方附近にも一部「セ」軍の侵入する等、四圍の状況活気を呈し、民心又緊張しありしが。突如5月23日払暁「カ」軍により尼市の政変決行せらる。其の概況左の如し、

- 1、23日午前3時頃、スモーリン中將は各民警署に向ひ武器提供の勸告状を發したるに尼市民警本署副民警長は各署に命令して武器を押収し、民警とともにスモーリンに降りり。斯くて第4民警予備民警並び鉄道民警を除く外、悉く「カ」軍に降りり。
- 2、本朝尼市々長は市会の重要なものと協議の上、不取敢予備民警35名を重要箇所に配置して警戒せり。
- 3、午後一時半頃、鉄道民警第四民警は、「セ」軍に武装解除せらる。
- 4、午後八時に至るや、市内重要官衙は殆んど「カ」軍の警戒部隊配備せられ、市役所及民警本署のみ予備民警と「カ」軍と相對峙しありしが、此間予備民警の過半「カ」軍に投降したるが如し。
- 5、尼市共産黨員は逐次行衛を晦ませり。

以上の如く、何等戰闘的行為を用ひず極めて平穩に行はれ、斯くて政変第一日を終る。二十四日も概して平穩に経過したるも、不穩の氣溢れあり。聯隊は、聯隊長始め大部分「アヌチノ」方面に行軍中のこととて、営内勤務者を加へ全員昼夜警戒に任じたり。

5月25日 尼市政変に関し浦潮より予備民警百余名来る。

「カ」軍の間に不穩の氣溢る。第一中隊中尉横山藤政、一小隊を率ひ停車場に至り予備民警を監視す。「カ」軍に武器提供を命ぜしも、趣旨徹底せず。26日に至るも依然民警署占領し武装巡察兵等点々徘徊す。聯隊は「オムスク」聯隊より武器若干を押収し、旅団において押収せるものと合し、聯隊において保管す。

尚本早朝、新民警全部新配置に就き、「カ」軍は兵舎に入れり。

5月27日 市内一般に平穩に歸し、大勢上、住民の大部も「カ」軍を謳歌するに至る。

本日午前スモーリンの請願により尼市の秩序維持のため、兵器を貸与す。聯隊は尚特別巡察の派遣を繼續し、且つ諜報勤務に力を用ふ。茲に於いて政変を終了し一般に平穩に歸し「ニコリスク」市内の秩序は「カ」軍に依りて維持せらる。

5月23日より藤田支隊〔長大佐藤田禎一郎、第二大隊（三中隊編成にして外に第九中隊、機関銃隊《四》、狙撃砲小隊《2》）、歩兵第62聯隊より將校以下48名、騎兵1小隊、工兵半小隊、臨時電信隊第2中隊の一部、装甲自動車1、鳩斑の一部、自動車隊（自動貨車2、機関銃用2輪自動車1）、外に師団參謀、經理部部員各1、砲兵將校以下若干、航空斑（飛行機2、將校

以下若干) 写真斑は、尼市—「イブポリトフカ」—「アヌチノ」間の偵察竝両地区間道路南北約二十吉米間の地帯、山頭を通ずる道路偵知の目的を以て、午前8時尼市停車場にて乗車出発す。

該支隊は、無事任務を終へ帰途に就かんとする際、新に師団側背援護の任を受け、一時「イズウェストカヤ」附近を占領し、後第七中隊の一小隊(梶佐古少尉以下三十三名)を「ルビヤッカ」に、第五・第七中隊・機関銃一小隊、無線電信小隊、有線電信隊の一部を沖少佐の指揮に属し「イワノフカ」に残置し、六月六日無事帰還す。

5月20日 蹄鉄工場新築落成す。

6月15日 沖大隊は、第七中隊(機関銃二)を「イワノフカ」に残置し、尼市に帰還の爲め出発、十六日帰着す。

6月28日 聯隊長大佐藤田禎一郎、任陸軍少将、待命被仰付。

丸亀聯隊区司令官大佐南沢岩吉、免本職補歩兵第十二聯隊長。

7月12日 夜半、尼市南方約三里、標高一九八西南麓附近に数十名の馬賊来襲し、附近部落を掠奪しありとの報に接し、之れを偵察し、要すれば掃蕩の目的を以て、第六中隊三上中尉以下八十名、機関銃一小隊(樫村少尉以下二十四名・馬七頭)を派遣す。

該中隊は、川辺特務曹長以下三十六名を尼市東方高地帯の南脚に沿ひ「オーストラヤ」山西麓より「ロフマータヤ」山に向はしめ、主力は尼市—「ラズドリノエ」道を経て「ロフマータヤ」山に向ふ。午前五時、「ロフマータヤ」山西南方高地端附近に達したるに、西南方約六百米の農舎附近より馬賊約七十名「ロフマータヤ」山頂に向ひ退却するを見る。中隊は敢て交戦することなく同高地西南麓に前進せんとするや、忽ち馬賊の射撃を受く。

茲に於て交戦するの止むなきに至り、敵前七百米に猛進し射撃を開始せり。

馬賊は地形の利に依り我は前進に困難を來たせしも、終に四百米迄接近す。

此時馬賊は逐次退却を開始し、次で我の山頂に達したる時は、全く東方高地に退却し終りたるも、若干の損害ありしものと察せらる。我に損害なく、小銃弾一八三、機関銃弾一三五〇を射耗し、午後三時三十分附近の情況偵察の後帰營す。

尼市西北方約五里「チュマコワ」附近に馬賊横行の報に接し、之れを偵察し且要すれば剿討すべき目的を以て、第八中隊野村小隊(小隊長中尉野村条吉以下四十四名、機関銃二、通訳将校少尉多喜弘を含む)は、午後3時30分兵營出発。「ニコリスク」—「チュマコワ」道を祥峰

嶺に向ひ急進す。

途中約四百の馬賊、今朝来「ポクロフカ」附近を徘徊せるを知り、「チュマコワ」小学校に位置し極力情況の偵察に力む。払暁西南方に猛烈なる銃声を聞き、直に出発。途中歩兵第六十二聯隊吉川少尉の率ゆる機関銃小隊に遭遇し、馬賊二、三百、昨夜来支那堡壘に抛り、同聯隊の秋元小隊は「ポクロフカ」方向より、又中隊長の率ゆる約一小隊・機関銃一は「ウリーチヘ」方向より、各々該堡壘に向ひ前進中なるを知り。古川小隊と行動を共にすべく「スイフン」河を渡河し、標高一五三北方高地に進出し、対敵行動を開始せり。

南部旅団長吉岡少将は、馬賊の抵抗頑強なるを知り、狙撃砲隊を増加するに決し、当聯隊より中尉天野郷三の指揮する狙撃砲二門及之れが護衛として機関銃二並騎兵小隊を附し、午前九時出発せしむ。

該部隊は、午前十一時「バウリュウコワ」着、同地南方に於て秋元小隊と遭遇し、騎兵小隊をして右翼の警戒及野村小隊との連絡に任せしめ、砲隊は一五三高地南方に陣地を占領し、支那堡壘東方高地敵陣地に対し射撃を開始す。午後零時三十分、野村小隊と確実に連絡し、爾後野村小隊は前進を開始し、猛烈なる射撃と共に活潑なる戦闘状態に入る。然るに敵は巧に地物を利用し頑強に抵抗し、午後七時三十分に至るも退却の兆なく、彼我对峙の姿勢となれり。各部隊は攻戦克く努め、騎兵小隊長先づ壮烈なる戦死を遂げ、野村小隊又下士以下数名の死傷者を出せり。殊に弾薬は殆んど射耗するに至れるを以て、午後八時天野中尉は騎兵をして長く敵前に位置せしむるの不利なるを知り、一時現陣地を撤し後退すべきを命ず。野村小隊は吉川小隊と共に平地方面の警戒を担任すべく、午後八時三十分死傷者を收容し「スイフン」河左岸に移動を開始、午後〔午前か〕二時「チュマコワ」村に到り、死傷者の処置を終り、更に前進の準備をなせり。

是より先、午後五時頃、装甲自動車班角和中尉の帰還の報告に依り、徹底的殲滅を為さんが為め、旅団長は聯隊より一個中隊（小隊長以下六十五名）・機関銃一小隊を派遣するに決し、鳩班の一部を合し、大尉井形準一之れを指揮して「バウリュウコワ」に向ひ出発す。

該中隊は、午後十時「バウリュウコワ」農舎附近に於て狙撃砲小隊に遭遇し、情況を知り、十四日払暁を期して攻撃するに決し、「バウリュウコワ」農舎北方高地稜線を占領して敵情地形の偵察、並友軍との連絡に努む。午前三時前進を開始せしが、途中敵に遭遇することなく、午前五時旧支那堡壘に到着し、之を占領せり。

諸情報及斥候の報告、足跡等を綜合して判断するに、敵は十三日夜半

より十四日午前二時頃迄の間に、北方「ガリヨンカ」方向に退却せしものの如し。

- 7月14日 午前五時、歩兵第四十三聯隊大隊長の指揮する増援隊到着し、続く吉岡少将到着し、野村小隊は午前八時中隊主力に合せり。  
爾後、各隊は戦場掃除を為し、十四日午後八時迄の間に全部帰還を終る。此戦闘に於ける聯隊の戦死者曹長下井手元一、上等兵川瀧金次郎、負傷者少尉多喜弘以下七名、馬賊の死傷は確実に知るを得ざりしも、戦場其他河川等に遺棄せる死体約二十、土民の言に依れば搬送せる傷者約三十、是等を綜合するに死傷約五十名を下らざるものの如し。
- 7月25日 国方大尉以下七十八名は、歩兵第六十二聯隊と「リハ」及「イブボルトフカ」の守備を交代し、尼市東部兵營に帰着せり。
- 26日 第七中隊（中隊長大尉石川茂以下百十六名）は、歩兵第六十二聯隊と「イワノフカ」守備を交代帰還せり。
- 8月2日 「ラコーフカ」に行軍せし沖大隊（第四中隊長大尉森政三以下百九名、第六中隊中尉三上強介以下百十一名、機関銃小隊中尉八木清一郎以下三十名、馬十一頭、機関銃二挺）は、「アヌチノ」方面に対し警戒せしむる為め、第六中隊中尉梶山芳三以下九十名を駐屯せしめしが、該隊は八月十五日尼市に帰還せり。
- 8月6日 第九中隊（中隊長大尉桑田精一以下百十六名、機関銃二）・狙撃砲一門（中尉占部訴一以下二十名）は、「グロデコウオ」支隊に配属せられ、第九中隊は「ホルワフトーワ」付近の守備に就き、狙撃砲は「グロデコウオ」に到り、既に同地に派遣しありし一門を併せて一小隊（2門にして下士以下42名）を編成す。
- 9日 「スパスカヤ」東南地区及「ワッシヤノフカ」附近に匪徒跳梁の為め、師団は十日払暁を期し、之を掃討するに決し、聯隊は「オシノフカ」地区隊と協力すべく、第二・第八中隊（各中隊混成）・機関銃隊・狙撃砲小隊（以上将校以下四百二十二名）を第一大隊長少佐鎌田作太郎の指揮に属し、「レッチオーフカ」に出動せしむ。  
該部隊は、十日午前五時「ルンザ」通過、八時三十分標高二三九高地附近に達し、初めて敵に遭遇す。次で「レッチホーフカ」南側及東側高地に約二百の露支人混合の「パルチザン」現出し、交戦約二時間にして敵は退却を開始せしを以て、「レッチホーフカ」南方高地に之を窮追せり。然るに附近一帶密林にして通視行動共に容易ならず、依て遠く敵を追撃することなく、該村落を占領し、附近の搜索と逆襲とに備へたり。戦場に遺棄せる敵の死体六、馬二、小銃二其他若干を鹵獲す。我に損害なく十二日無事帰隊せり。

- 29日 夜来「ソフィエアレキセーエフスキー」附近に数百の馬賊現出せりと  
の報に接し「グロデコウオ」第三大隊長少佐中里昌男は、将校以下百  
四十九名、機関銃二・狙撃砲一小隊を率ひ討伐の為出動。別に「ツス  
ノーワヤパーズ」守備隊より松尾大尉以下三十名、同地南方約千米の  
鞍部占領、之れと策応して払暁より行動を開始せしが、馬賊は既に之  
れを探知して退却し、隻影を止めず。大隊は附近を搜索したる後帰隊  
せり。
- 11月4日 初年兵掛として中尉三上強介以下百十四名（外に医務取扱として一等軍  
医小林英輔同行）は尼市出発、内地帰還の途に就き、十日無事詫間湾  
に上陸、屯営に帰着す。
- 10日 午前一時頃、不逞団は七十三露里橋梁を爆破し、尚ほ同夜暗黒に乗じ  
該橋梁両側の電柱五十三本を切断す。該橋梁爆破の際、其爆音に依り  
「ホルワトローワ」第九中隊より派遣したる下士以下十名（長軍曹岩部吉  
太郎）の斥候が「タローウオイ」東南方に達したる時、東側高地附近  
より約四十名の不逞団の為め射撃を受けしを以て、直に応射し、之を  
撃退せり。
- 20日 興凱湖西南地方の「パルチザン」嘉動し、東支線特に「ホルワトローワ」  
附近に於て其被害頻発するを以て、師団は一部配備を変更するに決  
し、十一月二十日第三大隊長少佐中里昌男を「ホルワトローワ」守備隊  
長とし、新に歩兵第六十二聯隊第十中隊を同地に増派せらる。  
左の通り当聯隊大正四年乃至九年戦役行賞発表ありたり、大正九年十  
一月一日附を以て、聯隊長藤田禎一郎以下間島事件に関係なき者（十  
一月二十一日、同二十二日、同一千四日官報附録を以て）及留守隊長  
中佐小柳亮一以下留守隊一般の者（十一月二十九日官報附録を以て）  
大正九年十二月二十五日附を以て、中佐平野克己以下間島事件に関係  
ある者（十二月一日、同三日官報附録を以て）
- 12月23日 歩兵第十六旅団及工兵第八大隊第一中隊の派遣に伴ひ、師団は配備を変  
更することとなり、聯隊は左の如く配備を変更す。
- |                           |           |
|---------------------------|-----------|
| 1、第一大隊（第三・第四中隊及第二中隊の一小隊欠） | 「ホルワトローワ」 |
| 第二中隊の一小隊                  | 五十八露里橋梁   |
| 第三中隊                      | 「ゴレンキー」   |
| 第四中隊                      | 「リポーフツイ」  |
| 2、聯隊本部                    | 尼市南部兵営    |
| 第二大隊                      |           |
| 機関銃隊                      |           |
| 狙撃砲隊                      |           |

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| 3、第三大隊（二小隊及一分隊欠） | 「グロデコーウォ」      |
| 狙撃砲一小隊           |                |
| 一小隊              | 「ソスノーワヤパレン」    |
| 一小隊              | 七十露里           |
| 一分隊              | 「バラノオレンブルグスキー」 |

大正11年

- 1月7日 服役延期中の下士以下は除隊することとなり、曹長松尾文平以下参百拾名は、尼市出発、内地帰還の途に就き、同十四日詫間湾上陸。同日屯営に帰著し、同十六日除隊す。
- 2月14日 侍従武官砲兵大佐西義一を差遣せらる。二月十四日、南部兵営部隊に対し、又二月二十一日第一（二月二十一日）第三大隊各駐屯部隊に対し、聖旨並に令旨を伝達せられ、且つ一同に御下賜品を分配せらる。  
24日より同月二十七日の間に於て、第二大隊は「グロデコーウォ」へ、第口〔記載なし〕大隊は尼市へ移転し、各其の守備を交代す。
- 3月23日 旅団命令に依り興凱湖西南岸地区偵察の爲め、「グロデコーウォ」より派遣したる藤偵察隊（第六中隊長藤忠義以下及第五中隊長中山惇以下、合計百七十三名、機関銃二銃）が「ヂャリコーウォ」南方台地に達したる時、赤色乗馬「パルチザン」約二百及徒歩者約七十と遭遇し、直に之れと戦闘を開始し、約二時間の後、遂に「ヂャリコーウォ」村を占領し、敵を東方及西北方に撃退したるも、敵の乗馬兵は遠く側背に迂回して我車輛隊を脅威し、且つ同村は赤化せると地形我に不利なる爲め、追撃を中止し、同夜「ボグスラフスキー」西北側一八七高地に後退して露營す。此の戦闘に於て下士・兵卒三名負傷す。  
右の報に接し二十四日第二大隊長少佐沖三雄以下四十二名、狙撃砲一・機関銃一、之が応援の爲め出動し、又「グロデコーウォ」部隊応援の爲や尼市より中佐長岡正雄、大尉桑田精一以下約六十名及中尉天野郷三の指揮する狙撃砲一小隊を派遣す。  
偵察隊（桑田大尉以下三十六名、狙撃小隊天野中尉以下三十名、追及す）は、更に行動を開始し、「カーメンルイボロワ」に向ひしが、爾後敵と遭遇することなく、偵察を終了し、二十七日無事任務を終へ帰還す。
- 29日 歩兵第四十三聯隊第二大隊長石井少佐の指揮する「ボクロフカ」守備隊は、原所属に復帰する爲め、聯隊は其の守備区域を担当することとなり、第十一中隊長大尉松尾正治以下中隊全員を派遣す。然るに爾後、同地附近の状況頓に陰悪となりしを以て、四月七日第十二中隊中尉稲森利助以下三十一名を同守備隊に増派し「シネロフカ」に駐屯せしむ。
- 4月22日 五十三露里附近に於て第四列車襲撃せられ、乗車中の中尉楠瀬正雄以下四

名は、直に之れと交戦し、尚ほ急報により五八露里守備隊より中尉福田松治以下三十一名、「リポーフツイ」守備隊より中尉田村禎一以下五十八名、「ホルワトーフ」守備隊より少佐鎌田作太郎以下九十九名及「グロデコーウォ」警備列車（指揮官中尉野村条吉以下二十三名）、尼市第二装甲列車（指揮官中尉松本昌次以下二十六名）、同地に出動し、敵を遠く北方に撃退し、午後五時無事各駐屯地に帰還せり。

27日 松田関附近に根拠を有する韓族共産党武装団隊は、四月中旬以降、我「ポクロフカ」守備隊行動地域内を徘徊して日夜掠奪を逞ふし、或は人質を拉致する等、暴戾を極むるに依り、人道上黙視するに忍びず、聯隊は左の如く三縦隊を以て之れを掃蕩するに決す。

- 1、支隊本部、聯隊長南沢岩吉以下十四名、（第二縦隊と共に行動す）
- 2、第一縦隊、大尉石川茂以下第二大隊百四名、機関銃二・狙撃砲一（「グロデコーウォ」一下松田関道を前進す）
- 3、第二縦隊、中佐長岡正雄及第一大隊大尉和泉栄三郎以下百十四名、騎兵小隊、山砲兵小隊、鳩班、機関銃四銃（「ポクロフカ」一上松田関道を前進す）
- 4、第三縦隊、少佐上田常男以下百八十四名、機関銃四・狙撃砲二（「プクロフカ」一上松田関道を前進す）

右各部隊は、四月二十七日及二十八日、孰れも駐屯地を出発し、途中泥濘車軸を没する難路と戦ひつつ、昼夜連続不眠不休前進し、四月二十九日、第一縦隊は「アレクセイニコリスキー」哨所西北方約三吉米の無名部落に、第二縦隊は「アレクセイニコリスキー」（下松田関）に到着、何等抵抗を受くることなく、家宅搜索をなし、銃弾薬・書類等若干を押収す。第三縦隊は、午前十一時西部「ウエルシヌイ」房子（上松田関）東側高地線に達したるに、該房子に在る口鮮人約五十名と遭遇、直に之れと戦闘を開始し、戦闘約二時間にして遂に敵を西南方森林内に撃退し、敵に相当の損害を与へたり。此間、共産党本部を占領し、又家宅搜索の結果多数の押収品を得たり。

翌三十日、上松田関を徹底的に覆滅する目的を以て同村を焼却せり。第一・第二縦隊は五月一日、第三縦隊は同二日、無事屯営に帰着せり。聯隊本部及第三大隊は、五月十六日より十八日の間に於て、歩兵第七聯隊第一大隊と、又第一・第二大隊は五月十八日より十九日の間に於て歩兵第三十五聯隊と守備勤務を交代す。

5月20日 聯隊本部及第三大隊は尼市南部兵營を、又第二大隊は「グロデコーウォ」兵營を、第一大隊は二十一日第二大隊と同列車にて各駐屯地を出発、内地帰還の途に就き、第一大隊・機関銃隊は五月二十四日、聯隊本部及第

第二大隊は同二十五日、第三大隊は同二十六日、浦潮港出帆。第一大隊及  
機関銃隊は同二十九日、聯隊本部及第二大隊は同三十日、第三大隊は同  
三十一日 詫間湾上陸。無事屯營に帰着す。

6月1日 復員第一日。各々予定に基き業務を実施し、六月四日復員を完結、平時  
状態に復す。

西伯利派遣中に於ける准士官以上の異動左の如し、

大正九年八月二日 少尉 多喜 弘

通訳要員として当聯隊に配属。

大正九年八月十八日 少尉 海内 弥八

通訳要員として当聯隊に配属。

大正九年八月二十三日 中尉 国方 慶三